

2020年の アメリカと映画館

2020.7 外国学図書館LS 近藤

外国学図書館ラーニング・サポーター（LS）の近藤と申します。
「2020年のアメリカと映画館」と題した紙上講習会をおこないます。

目次

1. そして誰もいなくなった:相次ぐ休館
2. その場で観るということ:映画館における鑑賞行為の意味
3. 別の仕方:配信、ドライブイン・シアターなど
4. アメリカ映画2020:配信映画選

本日は、4つのトピックをお話しします。

1. そして誰もいなくなった：相次ぐ休館

- 2020年3月 休館相次ぐ
- 戦時でもなかった事態
- 大作映画が延期

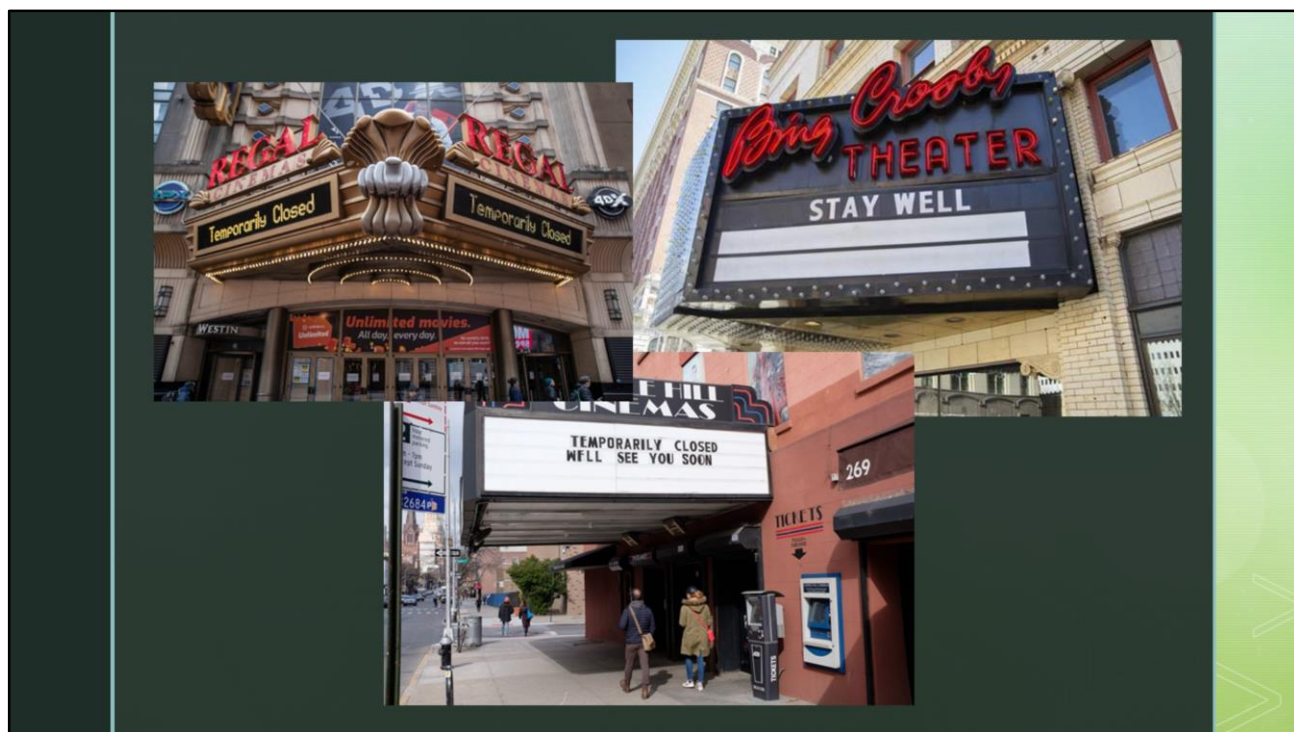


今年の3月には、とうとうアメリカでも新型コロナウイルスによる甚大な影響が明白になり、3月17日には全米の映画館が休館となりました。Box Office Mojoというサイトが完全に興行収入のデータの集計を「停止」する、つまり集計するものがほぼ皆無となった、という未曾有の事態になった訳です。付言しておきますが、アメリカでは大戦中でも映画館ではもちろん新作が上映されていました。トランプ大統領は「戦時の大統領」などという発言をしていましたが、戦時ですらここまで大体的に経済活動が停止するような事態はありませんでした。

当然そのあおりを受けて、この夏期待されていた大作映画を含む、数多くの映画は延期を余儀なくされることとなりました（むしろ、この事態にまだ近い例は、1918年のインフルエンザ大流行だと言えます）。

アメリカの映画シーズンにおいては、夏は大規模な娯楽映画が続々と公開される時期ですが、この3月の時点でその可能性が絶たれてしまったわけです。

代表的なものとしては、007シリーズの最新作『ノー・タイム・トゥー・ダイ』、実写版のディズニー映画『ムーラン』、アメコミ映画『ワンダーウーマン 1984』のほかに、『ブラック・ウィドウ』、『クワイエット・プレイス Part II』など、多数の映画が大スクリーンで上映されるはずでした。



画像：

<https://www.thewrap.com/movie-theater-seating-manufacturer-vip-cinema-shuts-down/>

<https://www.nydailynews.com/new-york/ny-shutdown-coronavirus-restrictions-beds-20200316-5ylg52wpsrg6vafkbfksis2kwq-story.html>

<https://www.journalgazette.net/entertainment/movies/20200318/virus-shuts-down-cinemas-nationwide>

映画タイトル(原題)	延期日時(6月29日時点)
A Quiet Place Part II	3月8日 → 9月4日
Black Widow	5月11日 → 11月6日
The Eternals	11月6日 → 2021年2月12日
The French Dispatch	7月24日 → 10月16日
Godzilla vs. Kong	11月20日 → 2021年3月5日
Jungle Cruise	7月24日 → 2021年7月30日
The Matrix 4	2021年5月21日 → 2022年4月1日
Mission: Impossible 7	2021年7月23日 → 2021年11月19日
Mulan	3月27日 → 8月21日
No Time to Die	4月10日 → 11月20日
Peter Rabbit 2: The Runaway	8月7日 → 2021年1月15日
Tenet	7月17日 → 8月12日
Wonder Woman 1984	6月5日 → 10月2日

この表は、延期された映画リストのごく一部にしか過ぎませんが、これだけの映画が公開の時期をずらしている訳です。

この中で最も公開予定日が近いのは、クリストファー・ノーラン監督(「ダークナイト」三部作、『インターステラー』)の『テネット』ですが、恐らく7月の時点で映画館の公開がさらに遅れるだろうと言われている中、予定通りの公開はかなり厳しそうです。

参照：<https://www.vulture.com/2020/06/here-are-all-the-movies-and-tv-shows-affected-by-coronavirus.html>

2. その場で観るということ： 映画館における鑑賞行為の意味

- 制約の多い場所であえて映画を観る
- 「あえて」受け入れる
- 単なる「行為」ではなく、「経験」

ここで、一度映画を、家でも電車の中でもなく、映画館という場所で観ることの意味を少し考えてみたいと思います。

そもそも、映画館とは、暗闇の中で、2時間近く同じ部屋にずっと座っていなければならない場所です。すなわち、そこは「閉鎖された空間」であって、そこから容易く出ることはできない訳です。もちろん途中で退室はできますが、わざわざ見に来た映画なので最後まで観なければ損したような感情が働くのではないのでしょうか。また、そこで自由に話すことも基本的にはできませんし、好きなものを飲食することもあまりできない訳です。さらに、観る作品に関して言えば、DVDをレンタルしたり、配信サービスを利用したりして旧作を見ることと比べてみた場合、極めて選択肢が限られています。

随分ネガティブな観点から、映画館での映画鑑賞について書いてしまっていますが、上記のことはごく当然の事実です。しかし、観客はそういった条件をあえて受け入れて、映画館へ足を運ぶ訳です。

これはつまり、映画館で映画を観るということは、単なる「行為」ではなく、「経験」、ということではないのでしょうか。大勢で同じ映画を観ることで、それは一種のイベントを経験したということになるのです。また、ありとあらゆる娯楽がスマートフォンの小さな画面から享受できてしまう今、注意散漫にならずに一つの作品と向き合うという経験がかえって特別なものとして認識されていくかもしれません。

あえて自分の自由をある一定の時間、束縛することで、その対価として特別な経験（残念な経験になることも少なくありませんが）を得る、という表現も出来るでしょう。しかしながら、そういった「イベントとしての映画鑑賞」がいまやほぼ完全にアメリカでは消滅してしまった、ということになります。

3. 別の仕方で：配信、ドライブイン・シアター

- 各ストリーミング・サービスでのオンデマンド配信
- Virtual Screening (チケット代の一部がその映画館へ)



こういった状況に適応するため、映画産業は新作をさっそく配信リリースする動きが見られるようになりました。1回のレンタルが20ドル近くする場合がありますが、例えばアマゾン・プライムを使って自宅で気軽に映画館で上映しているはずだった映画を観ることが出来るようになりました。

例えば3月であれば、スリラー映画“The Invisible Man”(邦題は『透明人間』。日本では7月公開), ジェーン・オースティン原作の“Emma”、アニメ映画の“Trolls: World Tour”、風刺ものの“The Hunt”などが早期の配信解禁となりました。

その一方、既存の配信プラットフォームで高額のレンタル代を払っても、上映館に全くお金が入ってきません。そこで、「バーチャル上映」という形で、実際の映画館を選び、チケット代を払い、配信にて新旧作を鑑賞するという試みも出てきました。

画像：<https://www.denofgeek.com/movies/universal-movies-theaters-vod-the-invisible-man-emma/>

3. 別の仕方で：配信、ドライブイン・シアター

- ブロックバスターなき時代を生きる
- 小中規模映画への注目



さきほど挙げた映画は、どちらかと言えば、いわゆるブロックバスターと呼ばれるような、大ヒットを期待するような大作志向の映画に近いです。

しかし、それからは、そういった巨額の製作費を投じて作った映画は、配信ではなく延期するという形を取っています。

そういった中、続々と配信が始まっていった新作映画とは、やはり小中規模の映画であり、派手なアクションやSFもの、というよりは、サスペンス、スリラー、人間ドラマのようなジャンルのものが多いです。

2020年の前半も終わり、上半期ベスト映画に関する記事がネット上で公開されておりますが、そのリストでよく挙げられているものとしては、例えば、スリラー映画の“Swallow”、“The Assistant”、ドラマ映画“Never Rarely Sometimes Always”などがあります。超大作がないゆえに、きちんと一つ一つの作品を見る余裕が映画評論家にも生まれたことの表れではないか、と個人的に思っています。

(画像:全てimdb.comより)

3. 別の仕方：配信、ドライブイン・シアター



- ドライブイン・シアター
- 車内なら安全
- 「名画座」の復権？

そして、ドライブイン・シアターが今再注目されていることに少し触れておきます。ドライブイン・シアターとは、上の画像の通り、皆が車に乗ったまま駐車場のような広いスペースに集まり、野外のスクリーンで映画を観るというものです。音声はもちろん車内にラジオや、小型スピーカーなどを使って聞こえます。これぞ、「ソーシャル・ディスタンス」を保つための映画鑑賞法であって、車内でなら安全に映画を観ることが出来るのです。シネマ・コンプレックスの拡大に伴い、こういった形式の映画館はめっきり減ってしまったようですが、また注目を集めているようです。

もちろん、新作映画が上映されることはほとんどありませんので、こういった空間は、準新作・旧作をかける「名画座」のような場所です。今やこういった「名画座」が（一時的かもしれませんが）息を吹き返しつつあるのは大変興味深い現象ではあります。

画像：<https://www.today.com/popculture/drive-movie-theaters-are-nostalgic-choice-during-coronavirus-t179350>

4. アメリカ映画2020:配信映画選



日本では今年の6月から映画館は再び開館し、延期になっていた「新作映画」が見られる状態になってはいます。

ただ、海の向こう側の新作に関しては、まだまだ待たなければならないのが現状です。そこで、最後にいくつか今見ることのできる配信映画をご紹介しますと思います。

“The Half of It”(2020) - アメリカの田舎町における青春ものというよくあるパターンを踏襲しつつ、そこに独創的な捻りがある上に、大変ウィットに富んだ現代のロマンティック・コメディです。過去の名画への愛にもあふれていて、映画好きにはたまらない設定になっていますし。今年の暫定ベストにアメリカにおけるいくつかの媒体で既に選ばれております。

ちなみに邦題は「面白いのはこれから」となっているが、このHalf of Itとは、本作の冒頭でも説明される「自分の片割れ」のこと。(Netflix)

“Selah and the Spades”(2020) - アメリカ東海岸（つまりエスタブリッシュメントの土地ということです）にある架空の私立高校を舞台としていながら、その生徒たちは実のところ、いくつもの地下組織を運営していて、影で学校のシステムをコントロールしている、という一風変わった映画です。高校生特有の問題が表面化する青春ものでありながら、そこに政治、あるいは犯罪ドラマの要素が融合しています。(Amazon Prime Video)

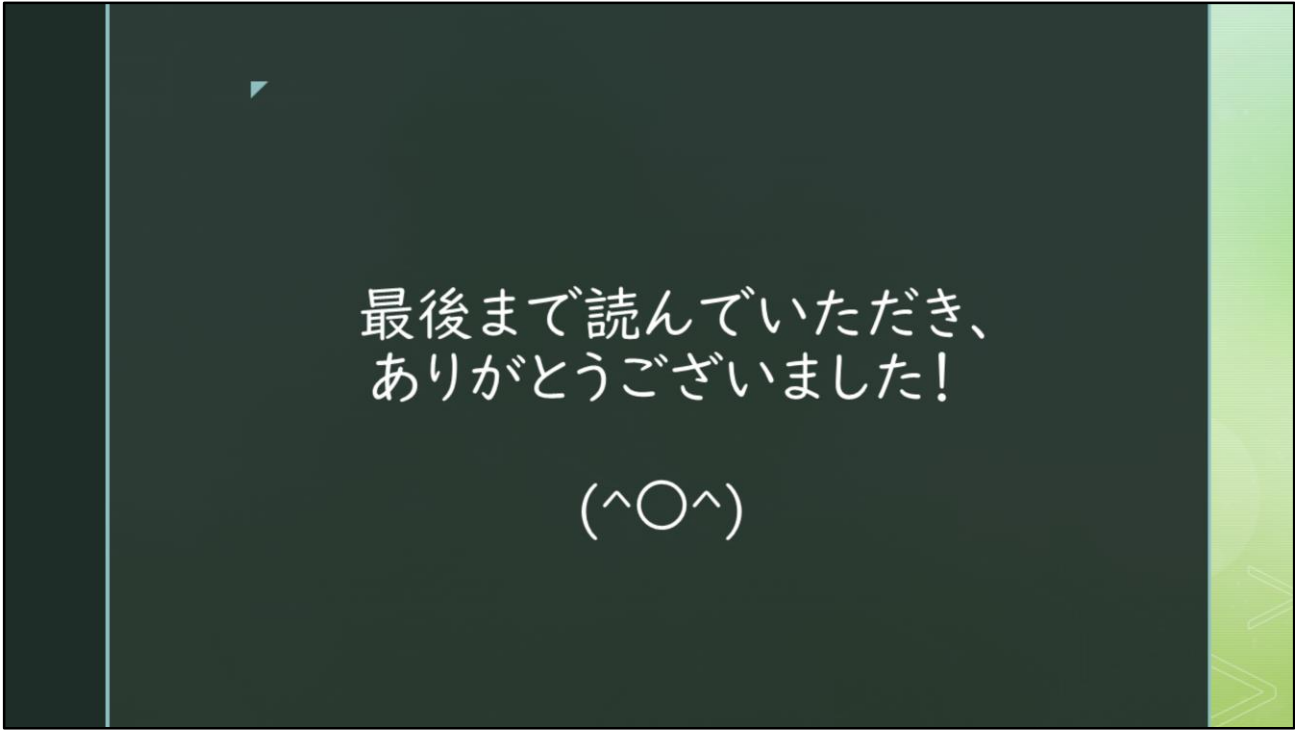
4. アメリカ映画2020:配信映画選



“Blow the Man Down”(2020) - ブラック・ユーモアたっぷりに、アメリカ東部の田舎町で起こる出来事を描いた犯罪ドラマです。「そんなはずではなかった」ようなことが連続して起き、主人公の姉妹は、影でその町を支えていた女性たちの本当の姿を知ることになります。時々突然始まる漁師の歌もなかなかいいアクセントになっています。(Amazon Prime Video)

“Da 5 Bloods”(2020) - 本作はカンヌ映画祭に出品予定だったので、日本の劇場で観られたかもしれなかった作品です。今までベトナム戦争を描いた映画に、アフリカ系アメリカ人の兵士がその物語の中心に据えられることはほとんどなかった。しかし、そこに往年の戦争映画、ないし冒険映画の要素を取り入れた、極めてユニークな物語に仕上がっています。その全貌は是非実際に本編を見て確認してほしいです。ただ、一つだけ設定を述べておきますが、主要登場人物の一人がトランプ支持者にいつの間にかなっており、周りの戦友から呆れられるという展開があり、それだけでも本作が、一枚岩では決してないマイノリティの姿を鋭く捉えていることが分かります。(Netflix)

(画像は全てimdb.comより)



最後まで読んでいただき、
ありがとうございました！

(^o^)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。